身体拘束廃止に関する指針

社会福祉法人函館松寿会

特別養護老人ホーム函館はくあい園

1 身体拘束廃止に関する考え方

特別養護老人ホーム函館はくあい園では身体拘束を基本的人権の侵害と捉え、精神的、肉体的に利用者を拘束すること無く、安心して生活できる環境を目指します。身体拘束は利用者の生活の自由を制限するものであり、利用者の尊厳ある生活を阻むものです。当施設では、拘束を安易に正当化することなく職員一人ひとりが身体的・精神的弊害を理解し、拘束廃止に向けた意識をもち、身体拘束をしないケアの実施に努めます。

(1) 介護保険指定基準の身体拘束禁止の規定

サービス提供にあたっては、当該利用者又は他の利用者等の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体拘束その他の利用者の行動を制限する行為を禁止しています。

【介護保険指定基準において身体拘束禁止の対象となる具体的な行為】

- 1・徘徊しないように、車椅子やイス・ベッドに体幹や四肢をひも等で縛る。
- 2・転落しないように、ベッドに体幹や四肢をひも等で縛る。
- 3・自分で降りられないように、ベッド柵（サイドレール）で囲む。
- 4・点滴・経管栄養等のチューブを抜かないように、四肢をひも等で縛る。
- 5・点滴・経管栄養等のチューブを抜かないように、または、皮膚をかきむしらないように、手指の機能を制限するミトン型の手袋等をつける。
- 6・車椅子・イスからずり落ちたり、立ち上がったりにしないように、Y字型拘束帯や腰ベルト、車いすテーブルをつける。
- 7・立ち上がる能力のある人に対し立ち上がりを妨げるような椅子を使用する。
- 8・脱衣やおむつはずしを制限するために、介護衣（つなぎ服）を着せる。
- 9・他人への迷惑行為を防ぐ為に、ベッドなどに体幹や四肢をひも等で縛る。
- 10・行動を落ち着かせるために、抗精神薬を過剰に服用させる。
- 11・自分の意志で開けることのできない居室等に隔離する。

(2) 緊急・やむを得ない場合の例外三原則

利用者個々の心身の状況を勘案し、疾病・障害を理解した上で身体拘束を行わないケアの提供をすることが原則です。しかしながら、以下の3つの要素のすべてを満たす状態にある場合は、必要最低限の身体拘束を行うことがあります。

- 1 切迫性：利用者本人または他の利用者等の生命又は身体が危険にさらされる可能性が著しく高いこと。
- 2 非代替性：身体拘束その他の行動制限を行う以外に代替する介護方法がないこと。
- 3 一時性：身体拘束その他の行動制限が一時的なものであること。

※身体的拘束を行う場合には、以上三つの要件を全て満たすことが必要です。

2. 身体拘束廃止に向けての基本方針

(1) 身体拘束の原則禁止

当施設においては、原則として身体拘束及びその他の行動制限を禁止します。

(2) やむを得ず身体拘束を行う場合

本人又は他の利用者の生命又は身体を保護するための措置として緊急やむを得ず身体拘束を行う場合は身体拘束廃止委員会を中心に十分に検討を行い、身体拘束による心身の損害よりも、拘束をしないリスクの方が高い場合で、切迫性・非代替性・一時性の3要件の全てを満たした場合のみ、本人又は家族への説明同意を得て行います。また身体拘束を行った場合は、その状況についての経過記録を行いできるだけ早期に拘束を解除すべく努力します。

(3) 日常ケアにおける留意事項

身体的拘束を行う必要性を生じさせないために、日常的に以下のことに取り組みます。

- ①利用者主体の行動・尊厳ある生活に努めます。
- ②言葉や応対等で利用者の精神的な自由を妨げないよう努めます。
- ③利用者の思いをくみとり、利用者の意向に沿ったサービスを提供し、多職種共同で個々に応じた丁寧な対応をします。
- ④利用者の安全を確保する観点から、利用者の自由（身体的・精神的）を安易に妨げるような行動は行いません。万一やむを得ず安全確保を優先する場合、身体拘束廃止委員会において検討をします。
- ⑤「やむを得ない」と拘束に準ずる行為を行っていないか、常に振り返りながら利用者主体的な生活をしていただける様に努めます。

3. 身体拘束廃止に向けた体制

(1) 身体拘束廃止検討委員会の設置

当施設では、身体拘束の廃止に向けて身体拘束廃止検討委員会を設置します。

①設置目的一施設内での身体拘束廃止に向けての現状把握及び改善についての検討。身体拘束を実施せざるを得ない場合の検討及び手続き。身体拘束を実施した場合の解除の検討。身体拘束廃止に関する職員全体への指導

②身体拘束廃止検討委員会の構成員

- ア) 施設長
- イ) 看護職員
- ウ) 生活相談員・介護支援専門員
- エ) 介護職員

※ この委員会には委員長、副委員長、書記を置き、総括責任者は施設長とし、その時参加可能な委員で構成する。

③身体拘束廃止検討委員会の開催

- ・定期開催します（月1回）。
- ・必要時は随時開催します。
- ・急な事態（数時間以内に身体拘束を要す場合）は、生命保持の観点から多職種共同での委員会に参加できない事が想定されます。その為、意見を聞くなどの対応により各スタッフの意見を盛り込み検討します。

4. やむを得ず身体拘束を行う場合の対応

本人又は利用者の生命又は身体を保護する為の措置として緊急やむを得ず身体拘束を行わなければならない場合は、①切迫性②非代替性③一時性の3要素の全てを満たしているかどうかについて検討し、『やむを得ない身体拘束開始に関する手順書』の手順に従って実施します。

5. 身体拘束廃止に向けた各職種の役割

身体拘束の廃止のために、各職種の専門性に基づくアプローチから、チームケアを行うことを基本とし、それぞれの果たすべき役割に責任をもって対応します。

（施設長）・身体拘束廃止委員会の統轄管理 ・ケア現場における諸課題の統轄責任

（看護職員）・医師との連携・施設における医療行為範囲の整備・重度化する利用者の状態観察・記録の整備

（生活相談員・介護支援専門員）・身体拘束廃止に向けた職員教育・医療機関、家族との連絡調整・家族の意向に添ったケアの確立・施設のハード、ソフト面の改善・チームケアの確立・記録の整備

（介護職員） ・拘束がもたらす弊害を正確に認識する・利用者の尊厳を理解する・利用者の疾病、障害等による行動特性の理解・利用者個々の心身の状態を把握し基本的ケアに努める・利用者とのコミュニケーションを充分にとる・記録は正確かつ丁寧に記録する

6. 身体拘束廃止・改善のための職員教育・研修

介護に携わる全ての従業員に対して、身体拘束廃止と人権を尊重したケアの励行を図り職員教育を行います。

- ① 定期的な教育・研修（年2回）の実施
- ② 新任者に対する身体拘束廃止・改善のための研修の実施
- ③ その他必要な教育・研修の実施

7. 身体拘束廃止のための基本方針の公表

身体拘束廃止のための基本方針は、利用者の求めに応じていつでも施設内にて閲覧出来るよう受付横に常備するとともに、ホームページ上に公表し、いつでも利用者及び家族が

閲覧できるようにする。

附則

平成30年6月13日より開始

平成30年10月10日 第6条①について改訂する

令和5年11月8日 7. 身体拘束廃止のための基本方針の公表を追加